



要点

- ・ 給餌は季節ではなく水温で決めます。水温が下がったら量と回数を落とし、おおむね 8～10℃ を下回って落ち着いたら完全に止めます。消化されない餌が腸に残るほうが危険だからです。
- ・ 一年で最も危険なのは春です。細菌や寄生虫は、鯉の免疫が回復する水温よりも低い水温で先に活動を始めます。
- ・ 夏は、鯉が最も酸素を必要とする時期に、水が最も酸素を保持できません。最低値は夜明け前です。
- ・ 絶対値と同じくらい「変化の速さ」が効きます。暖まった池への大量の冷水注入は、同じ水温までゆっくり下がるよりも鯉の負担になります。

水温	餌	管理のポイント
27℃ 超	量は控えめに、回数を分け、朝のうちに与える	代謝は最大、酸素は最少。曝気がしっかり効いているときだけ与える
20～27℃	高タンパクの育成餌。1回を大きくせず、少量を数回に分ける	成長にもっとも適した帯。消費も排泄も最大になる
14～20℃	量と回数を減らし、タンパクを落とす	秋は「下がる一方」と考えて先回りする
10～14℃	胚芽系など消化のよいものを少量、多くても一日一回	消化効率が落ちる帯。食べ残しを池に残さない
8～10℃	止める判断をする帯	下がって落ち着いたら餌切り
8℃ 未満	与えない	冬の管理に切り替える

低水温での給餌がなぜ危険か

水温が下がると、消化管の働きは実質的に止まります。それでも鯉は差し出された餌を口にします。消化されない餌が腸内に残れば腐敗し、腸炎の引き金になります。冬を越したはずの鯉が春先に落ちる例の一部は、ここに原因があります。迷ったら与えないほうが安全です。健康な鯉は、低水温期に数週間食べなくても問題なく越します。

この項目について、できること・できないこと

できること

- ・ 夜明け前の最低水温と日中の最高水温を、両方とも記録する
- ・ 一日あたり、一時間あたりの変化の速さを示す
- ・ 春の暖気で水温が病原体側の帯に入った時点を知らせる
- ・ 水温と溶存酸素を同じ時系列に並べ、夏の夜間の落ち込みを見えるようにする

できないこと

- ・ 細菌も寄生虫も検出しません。エロモナスも白点虫も H2Koi には見えません。見えるのは、それらが動き出す条件が揃ったかどうかだけです。
- ・ 病気を防ぐ装置ではありません。判断と処置は飼育者のものです。
- ・ GH（総硬度）は報告しません。KHも滴定ではなく算出値です。